

# 張家山漢簡『算数書』と『算経十書』との比較研究

On unearthed “Suan shu shu” and “Suan jing shi shu”

田村 誠  
(Makoto TAMURA)

張家山漢簡『算数書』とは、1983年末に湖北省江陵県で出土した竹簡書籍の一篇のことである。報告者は2001年9月より「張家山漢簡『算数書』研究会」の一員として、

- (1) 写真版に基づく識字に、数学・数学史的考察を加え、『算数書』算題を精確に解釈すること
- (2) 竹簡の出土状況および『九章算術』との比較から、『算数書』算題の配列を確定すること

を行ってきた。我々は多くの斬新でかつ精緻な解釈を発表してきたが、世界の研究者からはいくつかの異説も残されていた。そこで報告者はそれらの内、主な3つについてあらためて検証を行い、

- (1) 「大広」題の不明部分について、新しい写真では識字できる文字が増え、我々の解釈の妥当性が確かめられた。
- (2) 「春粟」題では、鄒大海氏が我々の釈文に必要と誤解した釈文の訂正は不要であると確認し、さらに氏が釈文を誤った理由の推定を行った。
- (3) 「盧唐」題では、問題設定について『算数書』研究会」では4案を提示していたが、そのうちの一つの妥当性について論じた。

という成果を得た。これらは2006年8月台湾で行われた国際学会「算数書及相關簡牘国際検討会 (Symposium on the Suan Shu Shu)」において発表し、討論を経たものを、さらに論文『算数書』中の3つの算題について—世界の『算数書』研究より—

(大阪産業大学論集 人文科学編 121)

にまとめた。さらに、2006年10月に出版された『漢簡算数書—中国最古の数学書—』(朋友書店)の中でも、この研究成果を反映させている。

一方、上記の国際学会において、郭書春氏は『算数書』と『九章算術』の算題で題意の共通するものの割合を論じ、両者の間に直接の関係性は無いとする説を発表した。従来前者は後者の源流の一つとする見方が主流であり、実際2004年の北京の国際学会ではそのような講演発表も見られた。「『算数書』研究会」でも、『算数書』はより上級の数学書から、役人の学習用として抜粋編纂されたものであり、数学書としての性格の強い『九章算術』には直接ではないにせよ、「上級の数学書」を経由しての関連はあると見ていただけに、これはかなり衝撃的な内容と言えた。

2007年度より『算数書』研究会」は「中国古算書研究会」へと発展的解消し、プロジェク

ト研究として研究活動が続いている。研究会代表者の張替氏は『算数書』と『九章算術』の算題間の数値比較により差異を検証している。報告者の関心は計算技術的側面にあるが、『算数書』の算木計算については研究会の小寺氏の解説が詳しい。研究会では『九章算術』の精細な解説が続けているが、報告者は郭書春の説を検証するべく、小寺氏の解説を踏まえ、主に算木を用いた計算技術的側面から『算数書』と『九章算術』との差異の研究が続いているところである。